

植物と人々：南アジアの園芸に関わる諸カーストめぐり⑥

トゥルシー(カミメボウキ)の子孫たち
インド・ビハール州ガヤー県のブイヤーンの人々の生活・信仰・政治

大橋 正明
(社会園芸学科)

Plant and People: Horticulture Related Castes in South Asia No.6
Posterify of Tulsi (Holy Basil)
Bhuiyan People's Life, Belief and Politics in Gaya District of
Bihar in India

OHASHI Masaaki

Abstract

Following 4 previous papers on horticulture related low castes, namely Pasi (wine maker), Koiri (vegetable grower), Mali (flower grower), and Teli (oil squeezer), this paper focuses on Bhuiyan, more severely depressed people mainly living in the southern Bihar. This paper not only describes realities of their hard lives, but also finds their important and indispensable roles for agriculture and soil related rituals in villages. Finally this paper urges that, despite of majority's claim that Bhuiyan and Musahar are identical as one caste, they were different. It is assumed that they were very close, if not identical, living in forest in the ancient India, but the former came out of the forest when Aryan had arrived here, and accepted the present position, while the later did not.

はじめに

筆者が数年間目を離したすきに、それまで何十年間も続いた慢性的貧困と社会的不安定のせいでインドの頭痛の種でしかなかったビハール州は、イ

ンド全体と同様に目覚ましい経済発展を遂げるように変化していた。例えば、93/94年度にかけてのビハール州の一人当たりGDPの金額は、インド平均の40.7%だったが、05/06年度にかけては僅か29.5%に下落したが、その05/06年度から11/12年度にかけての州経済の年間成長率は、シッキム州に次ぐ13.5%という高い数字を達成している¹。

この直接のきっかけは、2005年に国民民主同盟（National Democratic Alliance = NDA, 主にBJPとJDUの連合）のニティーシュ・クマールが、それまで15年間州政権を保持していた国家人民党（Rashtriya Janta Dal = RDD）を率いるラルー・ヤーダブから政権を奪い取ったことである。彼が指導するビハール州政治によって成長する経済は、包摂的であり、一つのモデルである、とさえ賞賛する本も出るようになった²。

本研究は、そのように目覚ましい変化を遂げるビハール州の南部に多い、いわゆる不可触民、あるいはインド政府からは指定カースト（Scheduled Castes = SC）と呼ばれる被差別カーストの中で、最も開発から取り残されて貧困に喘いでいる「ブイヤーン」と呼ばれるカーストの人々を取り上げる。このため本研究では文献研究に加えて、ブイヤーンのインテリや政治家4人、ブイヤーンの庶民3人、ムサハールの政治家と庶民各1人、そして他の指定カーストのNGOリーダーをインタビューした。

このシリーズでこれまでに取り上げてきた園芸に関わる四つのカースト、酒つくりのパーシー、野菜つくりのコーイリー、花つくりのマーリー、油絞りのテーリーと比べると、ブイヤーンは園芸そのものとの関わりはそれほど強くない。その理由は、この人々が今日まで取り残されている理由でもあるのだが、このカーストが特定の職業に結びついていないからだ。より正確に述べるとこの人々は、農村の集落外にしか住居を構えることが許されず、教育や農地保有の機会にこれまではほとんど恵まれず、低賃金の農業労働者として貧しい村人に使われながら、自然の中で慎ましく暮らしてきた人たちである³。

本研究においては、筆者が39年間に渡って関わってきた、ガヤー県ブッダガヤにあるサルボーダヤ運動⁴の拠点サマンバヤ・アーシュラムが開設・運営する、ブイヤーンの子供を主な対象とした全寮制の小中学校の卒業生等、数

人の生活の在り様と、ヒन्दゥー教より古い、土地に根差した信仰の在り様を叙述し、最後に最近の政治状況を反映した、ムサハールと呼ばれるSCカーストとの同一視の傾向について考察する。こうすることで、急激に変化を始めたビハール州の底辺で暮らす人々の日常の深い実相を描きだし、社会運動やNGOなどを通じて社会の前進を希求する人の参考に供したい。

1. ブタ飼う人々

ブイヤーンの人々は、本稿の後半で詳述するように、ムサハールと呼ばれるもう一つの指定カースト(SC)と同一視され、同様に差別される場合が多い。このムサハールの名称は、「ムス=ネズミ、ハル=捕える」に由来する(シン1999: p.267)とされ、それ故に不浄視、下賤視される。しかしビハール州南部農村部の多くの指定カーストの人々は、田圃に実った稲穂をたらふく食べて丸々と太った野鼠を捕まえて食用に供してきた。そうすると、ネズミの捕食を理由にこの人々だけが特に差別される理由は成立しない。しかし外部者の「彼らだけが食べている」という思い込みあるいは偏見が、それをもたらしていると言えよう。

同様なことが、ブタにも言える。インドの町や村でブタを見かけたなら、それを飼育する特定のカーストの人たちが近くに住んでいると推定できる。ビハール県南部の場合は、それはほぼ間違いなくブイヤーンだ。ブタや豚肉はイスラーム教徒の人々だけが忌むべきものではなく、多くの高位カーストの人々も避ける。とはいえ、多くの指定カーストの人々が好む食物であることも確かだ。つまりブタを飼うのはブイヤーンの人々に限られるが、野外のバザールで捌かれた豚肉を購入し食するのは、指定カーストの人々や、キリスト教徒、仏教徒などである。

貧しいブイヤーンの人々にとって、「ブタの経済」は重要である。ブタは周辺の有機ゴミや地中の虫を食べて回るので飼料代はほとんどかからない。人間が野外でする糞便も食べるので、衛生維持にも役だっている。さらに子沢山の豚は、繁殖も容易だ。三年ほどで百キロほどの体重に育ち、そこから60キロほどの肉が取れる。本調査の時点⁵で、豚肉は1キロ150Rs.(255円)で売れるので、ブロイラーのニワトリ(1キロ90Rs.=153円)よりずっと高値で

ある。供給が小さく需要が大きいので、このような高値になるのだろう。つまりブイヤーンの人々にとって、ブタは自分で大きくなりしかも他人に盗まれることの少ない、安全かつ貴重な貯金箱のようなものだ。

ブイヤーンの人々がビハール州の人口の何%を占め、どれだけ貧しいかを数字で正確に示すことは、政府がカースト単位の統計を取っていないので不可能だ。少し古い統計になるが、1991年時点でビハール州における指定カーストの人口割合は14.6%、ガヤー県では29.5%である。81年の統計によると、このビハール州の指定カーストのうち、多いのは順にチャマル(29.4%)ドサード(26.2%)、ムサハール(13.7%)、ブイヤーン(8.4%)である⁶。これらからビハール州におけるブイヤーンはおおよそ1.2%と推定され、1981年には85万人[前掲書: p.267]とされるが、人口増加率が他カーストより高いなら、もう少し多いかもしれない。しかし州南部及び南東部のジャールカンド州には多くのブイヤーンが居住していることで知られているので、ガヤー県では恐らく最も数の多い指定カーストの一つであろう。

ビハール州は07/08年度の州単位の一人当たり所得及び人間開発指数(HDI)⁷でも、まだインド全国最低レベルに位置している⁸。また09年のデータも、ビハール州の就学年数を僅か3.9年としており、インド最低である。そのビハール州のブイヤーンの人々だけの貧困状況を示すことは先に述べたように極めて困難だが、筆者は91年頃の州農村部の識字率が29.6%であるのに対して、ブイヤーンは僅か4.3%、ムサハールに至っては2.2%であるとしている[大橋2001:p.32]⁹。最近では指定カーストや貧困層向けのいくつかの教育施策が実施されており、後述するように子供たちの就学状況は今回の調査でも相当改善されたことが明らかだが、この人々の社会開発状況は今も相当遅れた状態であると推定できる。

2. ブイヤーン農民一家の生計、教育、そして農地を巡る動き

ここでは、ブイヤーンの平均的あるいは少し上と思われる農村の二家族の生計や教育、そして農地を巡る動きを記述し、この人たちの生活実態を把握してみよう。年代が下がるにつれ、女兒は男児には少し劣るが、ともに教育状況が改善していること、しかしダウリ(娘の高額な婚資)や汚職などの問題

は相変わらずであること、農民にとって最も重要な自然資源である土地の所有権を巡って常に緊張した動きがあることが、理解できよう。

2-1. アウラー村の男性B(年齢は50歳前後、8年生まで教育)

1) 家族と教育

本人が結婚したのは25年前で、当時妻は12~13歳で無学。この二人の5人の子供たちの教育などの状況は表1のとおりで、本人たちの世代と較べて悪化はしていないが大きな改善もしていないことが判る。

表1: 男性Bの子供たちの教育・結婚などの状況

関係	歳	教育	結婚	現状
長男	18~19	4~5年生迄	既婚、無学の妻と子一人。 家族はBの家で暮らす。	首都デリーの工場に住込み労働者
長女	16~17	2~3年生迄	2年前婚出、子供なし	別居
次女	10	3年就学中	未婚	自宅
三女	6	1年就学中	未婚	自宅
四女	3	n.a.	未婚	自宅

2) 営農規模と生計

父の時代から土地無しで、今は1カッター(150㎡)だけ保有している。これに加えて、刈分け小作(バタイヤ)を4~5カッター(600~750㎡)している。コメと麦がそれぞれ4モンド¹⁰収穫できるが、地主と収穫物を折半するので各2モンドが自分のもの。年間自家消費にはとても足りない。

このため、日雇い労働をやる。本人の報酬日額は、5キロの米(百Rs.相当)と朝食と昼食、さらにボトル一本分の酒代として20Rs.である。女性だと、3キロの米(60Rs.相当)、及び朝食と昼食である。それぞれを現金に換算すると、男180Rs.(306円)、女100Rs.(170円)相当であろうか。

本人は、毎年この時期から3月のホーリーまでの半年ほど、首都デリーの工場に出稼ぎに行く。そこの給与は月6千Rs.(10,200円)だが、内2千Rs.は食事と住居費で引かれる。その間の田畑の作業(除草、稲刈り、麦播きなど)、そして役牛2頭、乳牛1頭、子牛2頭、豚1頭、ヤギ6頭の世話は妻がやる。

3) 農地を求めて

最近は何回、サルボーダヤ系社会運動の「統一評議会 (Ekata Parishad)」が各地で主催する農地要求のデモに参加している。そこでは毎回偉い人が公有地を分配してくれると公言するが、まだ土地を手にしていない。

2-2. ガンガハル村の女性R(年齢は45歳程、8年間の教育)

1) 家族と教育

夫は50歳程で、当時としては高学歴の10年生修了。4人の子供の教育と婚姻、及び婚姻に伴う持参金(ダウリ)の状況は、下の表にある通りである。男女2人ずつの子供全員が比較的早婚だったのは、後述のように本人が村議会の副議長だった2005年から5年間は役得が多かったため、その期間内に全部済ませたから、という。

表2: 女性Rの子供たちの教育・結婚などの状況

関係	歳	本人教育	婚姻&配偶者の状況	持参金
長男	23	10年生試験に合格し、大学在学中	5~6年前結婚し同居中、妻は2~3年生迄。3歳と2歳の娘二人	5~6千Rs.を受取るが、式費用に。
長女 Prem	19	2年生迄で非識字	長男と同時に結婚・婚出。息子一人、娘一人。夫は8年生迄、日雇い労働者	1万Rs.現金、自転車、5キロの鍋類を渡す。
次女 Dupa	17	10年生試験失敗	3年前に婚出。三日前に息子出産。夫は7~8年生迄、小作人	1万Rs.現金、4~5キロ銀、5キロ鍋類を渡す。
次男 Chandan	15	8年生まで、現在父親と同様に無職	2年前に結婚し同居、妻は7年生迄、子供なし	1万Rs.現金、TVセット等を受取る。

2) 生計

夫は、最近は何も稼いでいない。このため、R氏が耕す農地からの収穫と、日雇い労働、そして夫の弟夫妻からの支援で暮らしている。

3) 保有農地の変遷

保有する農地は、最近亡くなった義父の名義なので義弟と共有であり、実

質は半分を夫が所有している。下の表に示したように、農地を巡る激しい競争の結果、所有面積はこの12年間で三分の一近くに減少した。以下の表3から、村人たちが農地を巡る社会運動に関わっていることも明示される。

表3: 女性Rの家の農地を巡る動き

入手方法	2001年当時	2013年現在
ブーダーン運動 ¹¹ で取得	15カッター (2250 m ²)	再調査の過程でいつの間にか他のブイヤーンの人の名義に変わり、占拠されている。本人は裁判をやりたいが夫も弟もその気なし。
政府による再配分	78デシメル (3120 m ²)	イザット (Izzat) と呼ばれる借金の担保として貸出し、今返還を求めているが、農地所有の証明書が見つからず、返還が拒まれている状況。
農地解放闘争で取得	24カッター (3600 m ²)	3カッター (450 m ²) は土地争いで失い、残り21カッター (3150 m ²) を耕作している
合計	8970 m ² (約8反)	3150 m ² (三反余り)

4) 行政村議会副議長

サマンバヤ・アーシュラムでの8年間の教育のなかでリーダーシップを取る経験があったRは、2005年の行政村議会(パンチャーヤット)選挙に出馬した。その際40,000Rs.を高利貸しから借り、ポスター印刷費や飲み食いにあてた。幸い当選し、副議長(アプ・ムッキヤ)になった。この行政村の議長がマオイスト¹²の嫌疑で長く獄中に置かれ、さらに出獄後交通事故で死亡したため、自分が長く議長代行を務めた。そのお蔭で、無給の役職ながら様々な役得があった。2010年に15,000Rs.をやはり高利貸しから借りて再出馬したが、落選してしまった。

行政村議会の役職者に大きな「役得」があることは、本人や周辺にとって自明のことだが、この役得は良く言って非公式の手数料、悪く言えば賄賂である。ここに、インド社会が抱える深刻な問題の一つの根とその深さを見ることが出来よう。

3. トウルシー・ビールと古層の土地神信仰

ブイヤーンというカーストは、いつどのように始まったのだろうか。古代に遡るその歴史を詳らかにすることは本研究の範囲を超えるし、当然のこと

ながら時の権力者の影響を受けて、その地位や文化は何度か大きく変化していると推察される。それでもブイヤーンの人々は、古代以来と思われる土地に根差した古い信仰を現在まで守り実践している。本章は、ブイヤーンの由来と、ブイヤーンが中心となって保持しているヒンドゥーより古い在地信仰について述べる。

3-1. トゥルシーの子孫たち

[クローキ1896: p.71] 及び[シン1999: p.266] は、ブイヤーンはアーリヤ人が移動してくる前のドラビダ語系の先住民であると述べている。同様に、今回インタビューしたブイヤーンのインテリも、一人はドラビダ系、もう一人はそれより古いオーストロアジア系の先住民であると主張した[バナーラシー13年8/20、サダー13年8/17]。現在はインド・アーリヤ語族系ヒンディー語の方言であるマグディー語を母語としているのは、アーリヤ人が権力を握り、森の住民だった彼らを下層カーストとして位置付ける中で変化したからであろう。

ブイヤーンの始祖や先祖について、サダーとバナーラシーは一部しか一致しない説を述べ、クローキは別な説を述べている。つまり、これについての定説は固まっていないということであろう。ブイヤーンのインテリの一人バナーラシーによると、コール・ビール(Kool Bhiil)王が森に棲む人々を統治し、紀元前1000年頃から侵入してきたアーリヤ人との戦いの中で、次第にアーリア人に従属を強いられた人々から、ブイヤーンを始め現在の指定カーストが多く生まれたと述べている。この説に従うと、現在の諸被差別カーストとブイヤーンは、元は同じ森の住民であった。勝手に想像すると、コール・ビール王の後のアーリヤ人の侵略やそれへの抵抗、交流などの中から、アーリヤ人が嫌がる特定の職業や役割を引き受けた諸集団が被差別の諸カーストになり、さらにその周辺にこのブイヤーンが位置付けられたのだろう。ちなみに次節は、この考えをある程度証明する材料となっている。

ところで今回の調査でインタビューした3人のブイヤーンのインテリの話、そして筆者のこれまでの調査¹³に共通したブイヤーンの前祖あるいは英雄は、コール・ビール王より後に位置する、年代不明のトゥルシー・ビールで

ある。ビールは「英雄」の尊称なので、ブイヤーンはトゥルシーの子孫と言える。トゥルシーとはシソ科のカミメボウキ(神目筈、*Ocimum tenuiflorum*, *Syn. O. sanctum*)のことで、農村のヒンドゥー教徒の家に行くと、中庭の一角に一本だけが大事に栽培されていることが多い。ヒンドゥー教徒にとってこのシソ科の植物は、ヒンドゥー教の主神の1人シバの配偶神のラクシュミー女神の化身であり、この葉は熱さましなどの薬草としても役立つ。

なお[大橋2001: pp34-35]によると、シャブリーという森に棲むブイヤーンの祖先の女性が、インド二大叙事詩の一つ「ラーマヤナ」の主人公ラーマ王子に、彼女が毒見した齧りかけのベール(Bel、木リンゴ)の実を差し出し、ラーマ王子がそれを食べたことがブイヤーンの誉れとなっている。しかし今回の調査で、サダーはシャブリーは別な被差別カーストの人であり、ブイヤーンとは関係ないと断じた[サダー、13年8/17]。

3-2. ブイヤーンのサブカースト

本シリーズで繰り返し述べてきたように、カースト内部にはパリーチなどと呼ばれるサブカーストがあり、伝統的にはこのサブカーストを単位に通婚の範囲が決まっていた。ブイヤーンのサブカーストは、今回の調査で以下の表4にある二つのリストが判明したが、これ以上の詳細は不明のまま残った。

表4: ブイヤーンのサブカーストの二つのリスト

[バナーラシー :13年8/18]		[シン1999:p.267]
Mahatwaar	バナーラシー及びバreshuワールが所属	Mahatwar
Raajbaar		Dharwar
Kherwaar		Bhogtar
Ghatwaar		Ghatwar
Kahatwaar		Soutar
Sevtaar	放浪し、蛇を食べる	Tirwar
Dodwaar	最底辺	-

二つのリストで一致するのはMahatwar(Mahatwaar) とGhatwar(Ghatwaar)の二つのみで、あとは総数を含めて一致しない。地域による違いもあるのか

もしれないが、誰も全体像を把握していない。インタビューしたブイヤーンの庶民の誰もが、これらサブカースト名を自覚したり意識しておらず、子供たちの結婚の際も、これに留意してないと述べている。つまりこのサブカーストは、他のカーストと同様に、次第に廃れている最中である。

3-3. アーサーリー供犠と、ブイヤーンのシャーマン

[大橋2001: pp.35-36]でも簡単に触れてはいるが、今回の調査で改めて驚かされたのが、下層カーストの人々の農業を中心とした村での暮らしの中で実践されている民間信仰の重要性と、それにおけるブイヤーンが果たす大きな役割である。その中で特に大きな豊作祈願の祭礼、アーサーリー供犠(Aasaaarii Pujaay)と、その中で中心的な役割を果たす、筆者のアシスタントでチャマルに属するカイラーシュと、ブイヤーン出身の元ビハール政府職員チャンドリカーの話を中心に、他のインタビューで得た情報を合わせて、その供犠やブイヤーンの果たす役割を再構成しよう[チャンドリカー8/17]・[カイラーシュ13年8/20]。

稲の苗が整い、雨季作の田植えを始める前のアーサール月の後半(7月前半)、村々ではいわゆるヤーダブなどOBC¹⁴と呼ばれる下層カーストと、ブイヤーン、チャマル、パスワーンなどの指定カーストの人々が集まり、アーサーリー供犠を最終火曜日からその前後に行うことを決め、村内の上層カーストを除く各戸から集金して回る。その金でOBCの人たちはヤギを、指定カーストの人たちはブタを捧げものとして購入する。

当日、OBCの人たちはヤギを村の女神寺院の中で、指定カーストの人たちはブタをその寺院の外で、それぞれ一刀両断で屠る。豊作祈願のために、ヤギの首は村の寺院の中に祭られている女神の前に、ブタの首は恐ろしい力を持つ土地神を祭る質素な憑



写真1 憑代したディハワール
(右側の数個の石)

代のディハワール (Dihawaar) の前に奉じられる。本体はその後解体され食用の肉となり、出資した人々に分けられ、人々は祝宴を張る。特にブイヤーンの人々は他の指定カーストの人々より長く、三日間に渡って肉と酒と踊りに興じる。

この祭りで一貫して中心的な役割を果たすのは、ブイヤーンに属するマンジー¹⁵と呼ばれるシャーマンである。このマンジー、この祭りではブタとヤギの首をお下がりものとして手に入れる。前夜と当日、ドールと呼ばれる太鼓を叩いて場を盛り上げたチャマールの人々も、ヤギとブタの肉を褒美として貰い受ける。

このマンジー、写真2にもあるように一見するとただの村人だが、指定カーストの村人の信仰では多くの役割を果たしている。例えば、新婚の嫁が村から出ていく、あるいは入ってくる場合、写真にあるディハワールにお参りし



写真2 マンジーと呼ばれるシャーマン

て、マンジーが土地の悪霊が憑りつかないように願う。田植えの前に自分の田圃のマンジーを招き、葉で作った神にひよこの心臓の血とマファ酒、穀物を振り掛けて豊穡を祈願する。また収穫感謝のために、マンジーは初穂にひよこの血を捧げる。死者が出た指定カーストの家々

にある祖先霊を祭る神棚シラーガル (Siraa Ghar) の前で、鎮魂儀礼を執り行う。また失せ物探しや病気快癒のためにも、村人はしばしばマンジーを頼り、そのたびごとにマファ酒一本分 20Rs. 程度のお布施を払う。このマンジーは、世襲あるいは指名で代々引き継がれている。

村のマンジーでは手に負えないような、深刻な病気や探し人などになると、より数が少なく、より高位な霊能力者バガット (Bhagatt) の出番となる。彼は真言を操り、悩み事、病気、探し物などの相談に乗る。このためには、供

儀のためのニワトリ代などマンジーより多くの金が必要となる。バガットは必ずしもブイヤーンではないがブイヤーンが最大で、ドサード、チャマールといった指定カーストの人々が続く。有名なバガットのところには、OBCのヤーダブカーストの人も詣でるが、ヤーダブのバガットはほとんどいない。ちなみにオージャー(Oojhaa)とも呼ばれるが、それは蔑称である。

こうしてみると、このトゥルシーの子孫たちは、アーリヤ系の人たちによってもたらされたバラモン教やヒンドゥー教の文化より古い文化や土地神信仰を、その古い兄弟であるチャマールやパスワーンといった指定カーストたちと一緒に、今も保持・実践していることが明確になった。しかも指定カーストの中でも最も虐げられているブイヤーンの人々が、その中心的な役割を果たしていることは、彼らの誇りでもあろう。

優勢なヒンドゥー社会・文化から見るだけでは決して窺い知ることがなかなかできない文化や宗教の古層に、ブイヤーンの人々を通じて触れることが出来たことは、本研究の大きな成果と言えよう。

4. ムサハールとの関係

ビハール州政府の指定カーストのリストにあるブイヤーンとムサハールは、同じカーストであり、通婚もしているという主張は、筆者がこれまで訪ね歩いたインテリ、NGO活動家、政治家などのほとんどが異口同音に唱えている¹⁶。これに対して、今回インタビューしたブイヤーンの庶民3名とムサハールの1名は、この二つのカーストのコミュニティは異なっており、通婚もしていないと主張しており、まったく対照的になっている。

どうしてこのようなことが起きるのだろうか。一つの大きな理由として州の政治、すなわち選挙との深いつながりが考えられる。州政治において、より大きな影響力を獲得するために政治家は単一同質のカーストを単位としたまとまりを、得票数の拡大のために利用している現実がある。¹⁷議会制民主主義における一人一票という選挙制度の枠組みの中で、キャンペーンなどの選挙活動を通して、先に述べたカースト内のサブカーストの差異の消失や周辺の同様なカーストとの一体化が生じているのである。

つまり、こうした枠組みの重要性を知的あるいは実感的に理解するインテ

りや政治家たちは、異なるカーストの一体化を推し進める。一方そうした理解を持つ必要のない日常生活を送っている庶民は、従来のカーストの関係を維持している。こうして先に述べた対照的な現象が生れるのだ。

実際この調査で接した、ガヤー県のブイヤーンの大半の庶民は、ムサハールを狩猟採集で暮らし、ブイヤーンの差し出す水や飲み物を拒む、自分たちより偉いと考えているカースト、と理解している。

では、ムサハール側はどう見ているだろうか。ガヤー県カルモウニー村に他の14世帯と共に定着して暮らしている男性Lというムサハールの、生計やブイヤーンに関する話を見てみよう。

自分たちの生計の手段は二つ。一つは妻の物乞いである。毎日この集落の他の人と重複を避けるように、周辺の村を幼児を抱えて一人で回る。一日で4-6キロの米か小麦を得ることが出来るが、現金は貰えない。大きな祭礼の際には、町にも行く。男は乞食を決してしない。

もう一つは、本人が毎日出かける狩りの獲物。グレール(guleel)というパチンコで鳥やウサギを捕え、村で売る。コブラも捕まえるが、見世物用に売るため食さない。コブラに噛まれた時の毒消しの薬草を用心

のために常に持ち歩き、求められれば高値で村人に売る。写真の大トカゲは、自分たちの食用で、毎日のように捕獲できる。

このほかの収入源としては、日雇いの農業労働で一日4キロの米を得ている。妻は、女性しかやらない田植えや収穫によく雇われる。農業



写真3 獲物の大トカゲ(左手前)

は土地がないのでしていないが、土地があればやるつもりだ。またブタも飼うし、食べる。

ブイヤーンの大半の生計手段が男女ともに日雇いの農業労働であることに比べて、ムサハールの男性たちは森の中で自分の力を頼りに生きている。それ故この二つの集団を同一視するのは、現実的には相当困難である。実際このLは、「ブイヤーンは自分たちとは別なカーストで、自分たちの方が上に位置する。通婚はしない」と明言している。

これと関連して、ムサハールの婚姻に関わるサブカーストについて尋ねたところ、以下のような明確なサブカーストのリストと、スーリヤバシイー (Suuriyabashiii) であるLは妻の属するマガヒヤー (Magahiyaa) としか結婚できない、という答えが明確になされた。これを見ても、サブカースト意識が消滅しかかっているブイヤーンとの差異を思い知らされる。

表5: ムサハールのサブカーストのリスト

No.	名称
1	ドールバール Doorbaar
2	マハトワール Mahatwaar
3	マガヒヤー Magahiyaa
4	スーリヤバンシイー Suryabanshii
5	カテータル Katheetar
6	バトワリヤー Badhwaliaa
7	カルクリー Karkurii

ムサハールの祖先伝承説について、詳しくは調べられなかったが、先述したブイヤーンの前祖であるコール・ビールとトゥルシー・ビールは共通するようだが、ムサハール独自の英雄ディーナー・バドリイ (Diinaa Bhadrīi) が、各家庭では良く崇拜されているとのことであった[ラメーシュ13年8/16]。

とりあえずの結論を下すなら、この二つのカーストはチャマールやパスマーンなどの他の指定カーストと同様の出自をもち、恐らく森の中で最後まで残り続けた人々たちだ。そして一足先に出てカースト制のヒンドゥー文化に

直面したブイヤーンは、特定の職業にありつけず、歴史的に周辺化・窮乏化してきた。一方森に固執し、そこでの生活様式や文化を今も色濃く残すムサハールは、自然環境が許す限りブイヤーンより優位な生活を続けることが出来、またそれが彼らの序列意識になっていったのではなからうか。つまり、この二つのカーストは同じではないが極めて近い関係であると言えよう。

ブイヤーンが州都パトナを流れるガンディース河以南に多いのに比して、ムサハールはガンディース河以北に大半が居住し、この二つはあまり混住しない。今回の調査はガンディース以南に限られているので、以北の多数のムサハールを観察したりインタビューできなかった。そのために、ここで述べたことが誤っている可能性が排除できないことを、付け加えておきたい。

まとめ

今回は、伝説上の英雄トゥルシー・ビールの子孫と自ら考える、インドのカースト制度の最下層の被差別あるいは指定カーストの中でも、特に貧しい状態に置かれたビハール州ガヤー県のブイヤーンの人々の生計や教育、結婚や農地などに関する日常生活上の実態、土地に根差した古層の民間信仰における彼らの活躍ぶり、そしてブイヤーンとムサハールという生活文化の異なる、しかし歴史的には相当な近接性のある二つのカーストの関係について、近代政治制度の影響を考察した。

外から、あるいは上から見ては見えにくいものを、当事者の視点や実感に沿って見ることによって、それまでとは根底的に異なった社会文化を、社会変革を目指す人々に見て頂き、活動の在り方をしっかり再考する一助になれば幸いある。

参考文献

大橋正明、2001、『「不可触民」と教育：インド・ガンディー主義の農地改革とブイヤーンの人びと』、明石書店

大橋正明、2008、『植物と人々：南アジアの園芸に関わるカースト巡り③-インド・ビ

ハール州ガヤー県の野菜カースト」、『園芸文化』第6号2009年7月恵泉女学園大学園芸文化研究所

Crooke, W., 1896, *The Tribes and Castes in the Northwestern Provinces and Oud*, vol.2 & 4, Office of The Superintendent of Government Printing, Calcutta, India, 但し引用はこの復刻版による。Asian educational Services, New Delhi, India

Directorate of Economics & Statistics, Bihar Statistical Handbook 2012, Department of Planning & Development, Bihar State Government, Patna/India

Sing, N.K. & Stern, N.(edt.), 2003, *The New Bihar-Rekindling Governance and Development*, HarperCollins Publishers, Noida/India

Singh, K.S., 1999, *The Scheduled Castes, Anthropological Survey of India*, Oxford Univ. Press. 1999, India

注

- 1 Basu,Kaushik, *The Bihar Economy: An Overview and Some Field Notes*, pp.9-11, at Singh N.K. & Stem N. , *The New Bihar*, HarperCollins Publishers, Noida, 2013
- 2 ビハールの開発をモデルと呼ぶのは、Singh & Stern 2013を参照。
- 3 ブイヤーンについて、詳しくは大橋2001を参照されたい。
- 4 サルボーダヤ運動は、A.K.ガーンディーが提唱した「全員の向上」を目指す非暴力の社会改革運動。農地の寄進とその貧農層への分配を行った1950年代のブーダーン運動はその典型例。現在でも、ガーンディー主義に基づいたNGOのSEWA、農地の権利を求める社会運動のEkata Parishadなどが活発に活動している。
- 5 本調査の実施は2013年8月中旬。
- 6 大橋2001: p.23
- 7 人間開発指数(Human Development Index, HDI)とは、それまでの国内総生産(GDP)などの経済的側面だけに着目した指標とは大きく異なり、各国の人間開発の度合いを測る新たな包括的な経済社会指標。1990年の人間開発報告書創刊版以降、毎年発表されている。HDIは各国の達成度を、長寿、知識、人間らしい生活水準の3つの分野について測り、それらを総合して0と1の間の数値で表す。具体的には、平均寿命、教育水準(成人識字率と就学率)、国民所得を用いて算出する。

- 8 Ahluwalia2013: pp.21~23, @Singh
- 9 [ビハール州2012: p.13]にある2011年センサスで、ビハール州の農村の識字率は男性71.90%、女性53.33%に改善している。
- 10 1モンドは40キロ。粳米を精米すると30キロ程度に減少する。
- 11 ブーダーン運動は、非暴力のガンディー主義思想に基づき、大土地所有者から土地の自発的寄進を求め、それを貧困層に再配分する1950年代の民間版農地改革運動。
- 12 マオイストは、貧しい農民を軸に革命を行うことを目指す毛沢東主義を信じる政治集団。インドでは1967年に西ベンガル州ナクサルバーリーで起きた農業労働者による土地占拠闘争から武装闘争を始めた。ナクサライトとも呼ばれる。現在でも、オディシャ州などで武装闘争を続けている。
- 13 [大橋2001: p.34]を参照
- 14 OBCとは、Other Backward Classes(その他の後進諸階級)のこと。様々な優遇措置を受けている指定カーストや指定民族に含まれないが、OBCはこれらに準じる優遇措置を受ける。州政府が定めるOBCのリストの中には、本来ならカースト制がないはずのイスラーム教徒等の集団も含まれている。
- 15 マンジー(Manjhi)は、ブイヤーンの人々の名字として使われているので、シャーマンと適切に区別する注意が必要。
- 16 ブイヤーンの子供の教育に貢献したサマンバヤ・アーシュラムのリーダーのドワルコ・スンドラニー、ビハール州政府福祉大臣でブイヤーン出身のジータン・マンジー、今回インタビューしたムサハールの州議員、ブイヤーンの三人のインテリなど。
- 17 [大橋2001: p.26-30]、本シリーズ③[大橋2009: pp.154-157]を参照